



閑度雜談

下

15  
1259  
8止



15 他5  
1259 2243  
3 3止

閑度雜談下卷

目錄

三弦の妙子  
猿下子と産  
狂歌乃益  
園父子  
穂谷の寺傳  
京師の雷震

若狭の農  
難船の神助  
殺生心  
正院乃栴  
大坂の夜會  
藤谷の老僧

閑度雜談下卷

玄蕃寮の跡

玄蕃の跡

各番の倍

夜更の倍

閑度雜談下卷  
 玄蕃寮の跡  
 玄蕃の跡  
 各番の倍  
 夜更の倍  
 閑度雜談下卷  
 玄蕃寮の跡  
 玄蕃の跡  
 各番の倍  
 夜更の倍



閑度雜談下卷

○ある人お話よるに世市太郎といふ盲人の浄瑠璃三絃  
 お妙なりと名をられたものありある年伊勢お木偶の劇場あり  
 とくく〜ゆ〜ゆ〜ふ〜ふ〜ち〜ち〜ゆ〜ゆ〜の〜の〜や〜ん〜何〜も〜の〜三  
 絃の妙手と名をられたもの同く〜う〜ら〜ゆ〜ふ〜魚〜子〜あり〜市  
 太郎が上よのゆ〜と招牌とちが〜と市太郎き〜と甚不平  
 しくい〜ち〜ち〜ち〜ち〜が〜我上よとれたるぞ早く〜や〜ん〜ん  
 を改〜我下〜ひきさげ〜り〜る〜あ〜ぞ〜あ〜ぬ〜ゆ〜大〜り

迷惑し定りて双方大なる争ひをきかんとおもひてせん  
 とぞうとくらの某にそらうとひひあつとらあふ某のさうり  
 りれりる色なく市太郎めいふくく聞及る名人なり家  
 いふそより居らんやううもいたされよとあそくま  
 より主様もひの外さうもあそく大かんと安んどもさび  
 と市太郎が中のごくえんと改ぬをうと告ぐ市  
 太郎はよくはちうづた事なりとりひくくすまぬを三日  
 市太郎外に出るくくどりの某が様やう乃門前をさりし

よ志あるの初日を逆ぎくぬは肉あく某が今度つとむ  
 づたふと、そおおれ浄留り太夫と三弦のひ合とさけ  
 るぐ内ふのゆなれは撥を用はず多、爪むきあくと処とら  
 くと市太郎門外ふ立くとまると聞かると大  
 にねどられたあゆも我及ぶる妙手なり、いうゆる人ぞと  
 尋のさやうあふの某なりぬは嘆息とくはねあうれ  
 ちおちやまると凡我うまはるものあつとたまひ  
 ぶぐのちういうぬれ人ふ及ぶたくとゆんざんとその

開度雜談卷之下

おしく改りさやと我よりよよとたたり某が我技の妙か  
 めりのうらわゆる事なくけしふ人し投中げ子氣の和  
 平かな實ふとむね人しとべ市太郎かうく人の妙り  
 所し我技のわざと知くゆも過とつぎす忽ち服と  
 う譲りは是まる得がた人かやもか貴物まへし  
 られ凡人しとむねか人もむね此のうへりあふしす  
 くれする人こなるまはけしむるき事なくどや

○あ袂の國僻郷の農おきうでせんく二人つらくのり

おしくと見ちるる京師此風流繁義なる目をねどらうし  
 うしくはる高貴の術錯か人ととたぬるか殿づらもの壯麗  
 かかと門外しをわがたつてねえを内ふり車しそのあ  
 け徘徊とると門を守らるの見つひとあをねとつらと  
 のそらとあ来る二人とと人何者なるぞとけしうふしか  
 あとききくそりるに在り青侍ホウり出やもよせんの  
 しあもて二人大お恐怖しあ袂れ者やと都おがまん  
 のぼしし帝殿乃奇麗かりふとりく覚えどあふ来るん



思ふおかしういづくも久四十雀といへる鳥お來て一人の首を  
爰に肉を入しとて其まを口ふまをく

四十うふおひの内うむりりたる

とありとあがくいとやき今一人もそおひいふ

あさお道とわらぬそすれ

とけぎより命にうけく精神とあそめるあそふ

自終し一首れ歌とありそ青ゆふ大おねらた今

ゆりともどくふれとんは似ずとよひちかぐさ

ゆりそく

○越前有乳驛荒乳の馬夫孫市といふものり、妻

ら同國駄口駅に馬夫久七といふ老れ妹なり、年二十七八

免く子とてううふ、凡八ヶ月ふりる、右の腋下より一ツの小

瘡発し、後ハ大にふくつみ甚、孫市に大浦ふれ

瘍医をらうて伴お來て、診やむ、医よ、これ癰なり、

とて治さぶとて、この瘡ときりて、膿血大お送

がふ、創口も、赤むれ、とて、医大おねらた周章

一何とていふべしとて孫市とせしるにあやうき人ぞとて  
 うらぐらぐとあきぬとて車にのりてやじへばなむかよふ赤  
 子と引けしるるを女子とていふと死しとあつたふあつたり  
 其母を恙なく瘡をささる不日に愈ふり、せんりには信ふ谷口来  
 數年れ後けりとき、大に奇なりしゆ、ゆゑ其夫婦にゆい  
 ちののりしとてふのき、且あつてき書れ掖下と見たりいけり  
 瘡痕とていふと谷口某、京より來りて、たゞとていふと吉田  
 某、まゝ余よりいふべし、

後一書とていふ、劉敬叔が異苑とていふ、晋、安

帝義熙中、魏興李宜妻樊氏、懷妊過期不

孕而額上有瘡、兒穿之、出長、爲將、今猶存、名

胡兒、長山趙宜母、妊身如常、而解上瘡、搔之

成瘡、兒從瘡出、母子平安、やととの外、少とあづし

然るに和僕しむふ、かゝるまじき事、はりていふべし、

○文化十一年、甲戌、三月廿八日、種子島ノ平山世伯、マサニ京

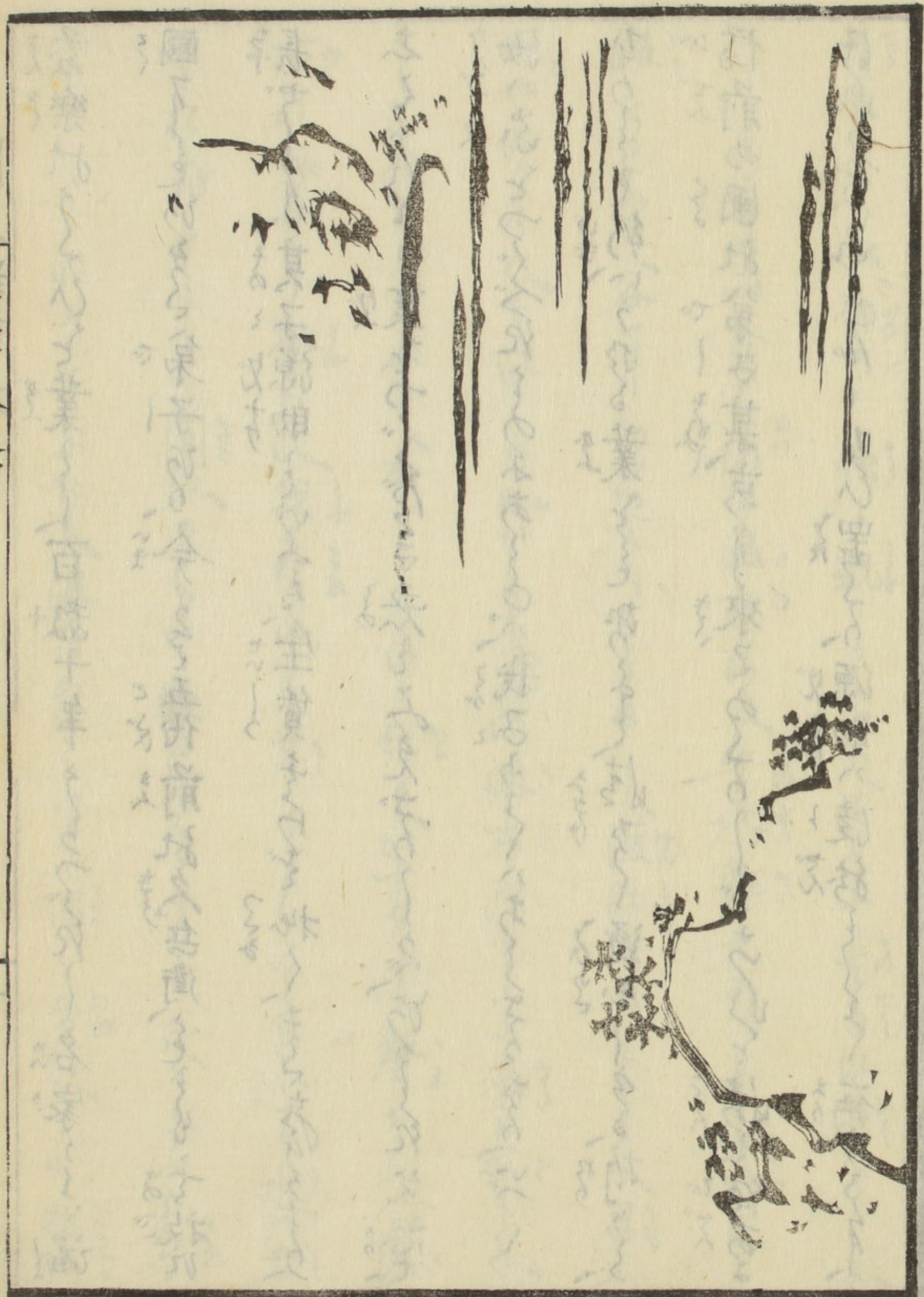
二海バントス辰、後二舟ヲ発シ、申時二隅州内浦ニ着セント



又、時ニ風漸クハケシク、半里計ニシテ、内浦ニ入コトヲ得ズ、已  
 ニ夜ニ入ヲ以テ、曉ヲ待テ舟ヲツケト欲シ、終夜海上ニ漂  
 フ、曉天ニ及テ、狂風猛雨、咫尺ヲ弁スルコトヨエス、地方ノ遠  
 近ヲ失ヒ、其向フ所ヲシラズ、是ニ於テ舟中相謀リ、船神ニ祈  
 リ、神ニ從ヒ舟ヲス、メントス、乃十二方ヲ紙ニ書シ、コレヲ結ビテ  
 神前ニヲキ念珠ノフサヲ以テコレヲ探トルニ、西南ヲエタリ、  
 初舟中ノ人、皆東方ニ行ヲ利トス、是ニ於テ、改テ坤位ニ  
 向テス、ム巳ノ時ニ至テ、地方ヲ見ズ、人々疑擬シ、再ビ探

ルニ同方ヲ得タリ、又進ムコト七八里、未ノ時ヲ過テ、ミル所ニ  
 激浪舳ノ板ヲ破テ、舟マサニ覆没セントス、因又議テ曰、舟  
 西向ニ行ニト巳ニ遠シ、而モ一滿岫ヲミズ、益スシテ益危シ、  
 寧神意ニ背凡、其方ヲ易シ、或曰、死生夕、神意ニ任ゼン  
 持論決セズ、コレヲ以テ神ヲ疑シ、重テ探ルニ、又復同方ヲ  
 得タリ、因テ意ヲ決シ、坤位ニユク申時過テ、初テ遠山  
 ラミル、未ダ何ノ地ナルヲ知ズ、漸就テコレヲミレバ、種子島  
 ノ背ニテ、其現知村ナルトコロニ着ス、蓋シ舟風浪ノ中





吾樂れうへいと業しく百敷十年うらつたれし名家うへ諸  
 國うへとあるる弟子あり今うへと五代前此久兵衛ともも其技に  
 長ざりし其子源助といふも生質そつとぞ拙くもあはるなり  
 ちんがゆと業とつぐださ老とみえざりし久兵衛は父志て  
 女ハ志とつぐだれものふあはるる我子ありてあはるるなりとて  
 なりしとつぐだる業ともあはるる情とて逐せしむる折り  
 備前の國れ弟子某京り來るるなりとてつぐだるる情とて海あり  
 ほれよりあはるるなり源助ハ徒然とて在るなり

せりりり佛ち僧と親しくなりほひふそまに遊び  
 うへちち山より流るる瀑布ありて水勢大なりと山品一  
 激るるあり谷一ありて源助ありて思ふ  
 所やありんそれより日ごとく六の瀑布れとて來り坐し  
 うへちとてうへちも細くあはるる聲をい淋  
 布れあきり奪り我ありの多耳ありて水音  
 のをねんてうへち聞ゆとて數日とるるなり  
 ちんがゆとてふちの瀑布のそと高くあはるる  
 勉強

努力<sup>いそぎ</sup>、月日<sup>つきひ</sup>とめまの急<sup>いそぎ</sup>、ざりざり、声<sup>こゑ</sup>、うらうらうと、  
 衝<sup>つ</sup>、身<sup>み</sup>ふ入<sup>い</sup>ぬれど、瀑布<sup>たふひ</sup>の音<sup>ね</sup>かどきく、  
 しく、あもすれど、調子<sup>てうし</sup>を乱<sup>みだ</sup>る、  
 精神<sup>せいしん</sup>を上げき、又<sup>また</sup>数<sup>かず</sup>月<sup>げつ</sup>とたると、  
 うらひのあも、瀑布<sup>たふひ</sup>の音<sup>ね</sup>、分明<sup>ぶんめい</sup>なり、  
 さるのしな、と、  
 ら、又<sup>また</sup>あ月<sup>つき</sup>を送<sup>おく</sup>り、は、  
 も、  
 水音<sup>すいおん</sup>と相<sup>あ</sup>和<sup>わ</sup>

調子<sup>てうし</sup>、うらひの、  
 声<sup>こゑ</sup>、  
 しく、  
 人<sup>ひと</sup>、  
 うらひの、  
 京<sup>きやう</sup>、  
 切<sup>きり</sup>、  
 源<sup>げん</sup>助<sup>すけ</sup>

おいらだ 京よりせのぬのち 父の家へ入ると 源助只今ゆい  
 又ふる面 入んじひ入る 奉家思ひかけなく 大おぼろけ  
 父のいうとういふせんしとこめらふ肉 久兵衛も我子のあやと聞  
 しく出とち入りの坐にたくとまをばかうつひとつべ  
 れるいぞ 一曲と言をの 下より 源助扇よりかきしうてふ音声  
 甚清亮に 一曲と調律にめまひんあれた 奴婢まきぐも  
 舞入と 聞居より 一曲とらんばくを乗手と 拍と、かぎりのなく  
 うほとび 汝がうとをちりゆりまうゆり今とぞ 臭の我子よ

とゆい 汝うけず大にあまうとてうよべへ 今日よりあを譲  
 業とほがく 我を隠居へんく 残生を居へなべへん 動  
 命ふり 源助ぼろけ 舞へん 父はふさ入と即日  
 うと 弟子をゆい 小告や 源助と久兵衛と名のゆい  
 身へ 別髪と祐也と稱し 退隠より 久を承そいふと又了代  
 業とつげふ 小おまうまうりゆい 弟子は感喜し  
 後ふおまう 加果と大にあまうとゆい 考く後子  
 源助業とほがく 久兵衛とゆい 源助別髪とゆい













ふぬまうくしとほしうしなるあせりつた血氣壯なるん... 且感... 各魚... 命...  
とせざるかのし...  
○京師立本... 舌蕃察のあり... 年樹...  
地... 瓦二枚... 蕃察... 能出  
此... 人...  
○あるさの... 甚各... 一錢... 容... 放...  
日... 食... 弟子... 糖飯... 香... づ...  
一

凡の... 推... 弟子... 其...  
師の... 一日...  
子... 六庚申の日... 晩食...  
盛饌... 夜...  
... 師...  
退き... 師... 顔色  
詩氣...  
一

もろいひりひりあつた中へ一人あつた師のあつたり各番うく  
 ういへが不平を懐たのしきともしゆとく歴論やんあ  
 一、諺より清水さの舞甚より花うろあくとくあ大り  
 款待としてくつてくつていつりかたうとどしどしあつたあ  
 了たけける僧のけれがも今朝合指初れたしわをいひ  
 衆僧大にうろくしはあつたこのもまづ定ぬく  
 晡時もるぬれし厨房のしきと平日ふとちとど大は  
 しりるしり師の僧ゆと汝今志げし終ぐくあ盛

饑飽めんしりしり入れあつた今夕のしり厨の命  
 しりるしり品ぐと我見あつた饑とそまへしり興  
 んしり門外の市店を托あつたあつたあつたあつた  
 尾がくたきしりるあつたあつたあつたあつたあつた  
 各我師あつたの間あつた才知通達の居居とあつたあつた  
 各奥入あつたあつた空廻しりあつたあつたあつたあつた  
 も二更あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
 うのあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

開慶新言卷下

十一

べいほうめいも罷りりてうらなひまふぞりうらなひて  
 声うらめしむ時師の信急し僕も命かこのあつて  
 てかへまづあつてうらなひとよ、命いりやうらなひ  
 うらなひりてかたひいりゆり餘鬼水水のぞむぐりて  
 その二斤より粗糲の飯六七椀喉と飛入りて味うらなひ  
 りてうらなひりて生るん地りてうらなひりて見合ふ只  
 惘然たりその時師の信急し声とけがすてうらなひ思ひ  
 うらなひりて食へて、性命ともらるるうらなひりてうらなひ

遊興奈後のうらなひりてうらなひりてうらなひりて  
 と後にお食ひり、五日の食もの、うらなひりてうらなひりて  
 珍羞美饌りりりきぬらん、数日食てりてうらなひりて  
 とさうりて、危穢の一搏飯とぬりてうらなひりて盛饌りて  
 うらなひりて、貴え、忽ち死と免れ、うらなひりてうらなひりて  
 が投擲り、投げり平生れ食もりりりりりりりりりりりり  
 ひりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり  
 りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

ねとてしちんれと叱りて衆をねらふ乃に免たりちちて  
 ぶめくろと席かほけく、拵謝とふの、おひり日ごの食と  
 ちくくもの、ごくちりしきねまもま我もくもく、ね  
 表誠ちるくく、ねりなり此信と各番のめ人まくハあ  
 ぶくくし、あれた老人の物作り

○西年の春雨志げくろくろく、江戸小名くくる、真顔  
 夢びく、俳諧歌くく、む人來り訪ひく、余とくく、おのやど雨  
 志げられたく、や民のなげねく、ちちちと、かの録倉の太大臣

ねるやをまれば秋のゆりひらぐ、嘆くをるまぐの人ひそく  
 につれく、ねくく、ちちちのちちちの、は顔、そ門人ぬん  
 とうちつれ、京にのぼく、雨日ご、浴く、居ま、大井川のちれ  
 くのたび宿りやま、ねたおの人く、うちく、その雨、な  
 ひもく、明日ち、必川ご、ねく、ちちち、ちちち、ちちち、  
 えぬく、うく、く、く、一人戯く、我、俳諧歌く、み  
 おひく、八つ、時のおちり、各雨やめの歌く、龍神、お、晴と  
 の奉らん、うく、く、衆、ちちち、ちちち、ちちち、各一首

うるさふりの人きこひけあまぬくて 封<sup>とむ</sup>て 神<sup>かみ</sup>の 供<sup>とも</sup>  
 まの<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>あまひ雨<sup>あめ</sup>やまぢなはしとくもたれとくづれの秋<sup>あき</sup>神<sup>かみ</sup>  
 まよあまひつるちん<sup>ちん</sup>と評<sup>ひやう</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>ち<sup>ち</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>  
 しくそのあま<sup>あま</sup>床<sup>とこ</sup>の上<sup>うへ</sup>をきよなと秋<sup>あき</sup>とそり<sup>そり</sup>晴<sup>はら</sup>てい  
 ろうま<sup>ま</sup>う<sup>う</sup>づば<sup>ば</sup>よ<sup>よ</sup>夜<sup>よ</sup>雨<sup>あめ</sup>やまの<sup>の</sup>聖<sup>せい</sup>朝<sup>てう</sup>元<sup>げん</sup>ま<sup>ま</sup>しく起<sup>おこ</sup>れ<sup>れ</sup>大<sup>だい</sup>に  
 うら<sup>ら</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>秋<sup>あき</sup>とあ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>  
 その一首<sup>いっしゆ</sup>も<sup>も</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>生<sup>せい</sup>教<sup>けう</sup>れ<sup>れ</sup>秋<sup>あき</sup>い<sup>い</sup>ち<sup>ち</sup>ん<sup>ん</sup>とあ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>  
 此<sup>こゝ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>  
 此<sup>こゝ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>

そのい<sup>い</sup>秋<sup>あき</sup>た<sup>た</sup>そのの<sup>の</sup>一<sup>いち</sup>字<sup>じ</sup>とむの<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>  
 ぢ<sup>ぢ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>  
 此<sup>こゝ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>  
 此<sup>こゝ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>  
 此<sup>こゝ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>  
 此<sup>こゝ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>  
 此<sup>こゝ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>  
 此<sup>こゝ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>  
 此<sup>こゝ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>



に笑ふ田舎翁は、古あをねがえふはひく嵐は吹ぬものか  
 決しつるを歌人れんやせはけりものといへるも亡友すく  
 いやよりのぬのんも古歌のどく子の盛ると明日う个思  
 ひしよそ夜俄よひのうねく花とちちとまどれたとの  
 もあつと何もの時を己に後悔なりけりものろろりり  
 あつと秋しりものさうふ知らるるやれはうねと決定の  
 なるねがえふはひたるものなり、あつとあつとまきまき  
 尾の歌人のんやうをよとあつとあつと大尾

日本書記	全十五冊	花洛名所圖繪	全八冊
同片假名附 <small>一名黒羽本</small>	全十五冊	和漢事始	全十冊
交替式	全壹冊	名物六帖	全廿二冊
三鏡	全十六冊	一休諸國物語圖繪	全八冊
和名類聚鈔	全五冊	二人比丘尼圖繪	全二冊
詞のちち又	全二冊	釋迦八相物語	全六冊
同補遺	全二冊	俳家故事談	全四冊
男信	全三冊	橘庵遺筆	前編全十冊 後編全十冊

書林聖華房

皇都寺町通六角南式部町

山田茂助藏

